

# 第1章 松本オルガン工場

## 生い立ち

元治2年(1865=慶応元年)2月23日、上総国<sup>シユス トコシロ</sup>周准郡常代村の農家の長男として生まれた松本新吉は音感が優れ、笛吹きの名人だった。

明治16年(1883)、19歳の松本新吉は15歳の山田るい(松本家【図1-1】の隣、伊藤家から山田家に嫁入りした梅吉の娘で、後出伊藤虎吉の姪)と結婚した。新吉は器用で、農閑期には左官としても働いた。新吉の生立ちは『松本新吉伝』(大場南北著、うらべ書房)に詳しく記されている。

松本家の隣、伊藤家で嘉永3年(1850)頃に生まれた伊藤虎吉(後の西川寅吉)は三味線作りの名人だったが、横浜に出て、明治9年頃から外国人技師の助手を務め、オルガン作りに熱中し、明治17年にオルガンを完成し、オルガン製造事業を始めた。

常代村で生まれた人には、楽器に惹かれ、名人になる人が多い。明治4年(1871)に生まれ、4歳で盲目になった今井新太郎(後の今井慶松)は山田流箏曲家として大成し、宮城道雄と並び称された。新太郎と新吉は気が合い、話し合うことが多かったようで、『松本新吉伝』に、新太郎が新吉に、「西洋楽器に取り組んでみたらどうか」と話しかけたことが記されている。明治20年、西川寅吉が横浜日之出町に風琴<sup>(注)</sup>製造工場を建てたとき、新吉が横浜に出向き、西川風琴製造所の見習いとして西川寅吉に師事した。新太郎の話は、そのきっかけのひとつかもしれない

松本家：周准郡常代村992番地

松本新吉の父：治郎吉：天保9年(1838)11月1日～明治30年(1897)1月18日

母：みや：天保13年(1842)8月8日～大正8年(1919)9月9日

(注) 風琴：オルガンのこと。ピアノは洋琴といった。

## オルガン製造所見習い

### 1. 徒弟修業

明治20年、新吉が23歳のとき、るいの叔父、西川寅吉が横浜の日之出町に建てたオルガン製造所で見習いとなり、夫婦で住み込んだ。見習いは無給だから、暮らしは容易なものではなかった筈だが、新吉はオルガン作りの<sup>ワザ</sup>技習得に熱中している。

『横浜開港資料館紀要第23号』(出典参照)記載の「故大野木吉兵衛氏の浅野六之輔氏あて質問への回答書」に、「松本新吉氏は、明治20年、日之出町工場建設の際、建築家の一人として来浜したが、建築よりオルガン作りに興味を持ち、その後工場に残り、虎吉翁に弟子入りした」と記されている。

常代村の松本新吉は、田畑の仕事をしながら、左官として壁塗りの仕事もしていたので、日之出町

工場の壁塗りに出かけ、工場で見えた西洋楽器オルガンに惹かれて工場に住みついたのだろう。明治22年に長男広が、24年に長女栄が誕生している。

「見習い」は言葉通り、オルガン作り、調律、修理や、ピアノ調律、修理を見て覚え、指示された作業を繰り返して身に付ける。覚えるべきことが多かった。十代の丁稚<sup>テツヂ</sup>は、単純な仕事をひとつ身につけるのに5年位かかったとのことだが、新吉は、技を習得するのが早かった。新吉は、見たこと、聞いた話は何でもその場で覚えたという。集中力は抜群で、覚えたことは実践し、習得している。

明治26年の解雇まで、西川オルガン製造所での徒弟期間が約6年だったが、年少の丁稚とは違い、短期間でオルガンとピアノの製作、調律、修理を習得し、西川オルガン製造所の調律師として、調律、修理を担当したようだ。新吉の習得の早さは驚異的で、この集中力は、明治33年渡米時に、ブラドベリー工場でも発揮された。

日之出町のオルガン製造所には、イギリス人調律師クレン(Crane)やドイツ人ピアノ技術者ドーリング(Doering)等がよく出入りしていた。新吉はクレンやドーリングにピアノやオルガンの調律、修理を教えてもらったようで、理解、習得は極めて早かった。明治23年、西川寅吉が第3回内国勸業博覧会に出品するピアノ製作を間近で見たのも、理解を早めたのだろう。製造所内では紙腔琴<sup>シコウキン</sup>(後出)も作っており、新吉は紙腔琴作りも手伝ったようだ。

出典：横浜開港資料館紀要第23号 故大野木吉兵衛氏所蔵資料

故大野木吉兵衛氏の浅野六之輔氏あて質問への回答書：(松本新吉関連記事抜粋)

大野木吉兵衛：浜松短期大学名誉教授。日本洋楽器製造史研究の先駆者。

浅野六之輔：明治30年生まれ。明治45年、西川工場入所。調律師。

◎質問：松本楽器の始祖新吉氏との関係は？

◎回答：松本新吉氏とは同郷同村のみで、何の関係もありませんが、明治20年、日之出町工場建設の際、建築家の一人として来浜したが、建築よりオルガン作りに興味を持ち、その後工場に残り、虎吉翁に弟子入りし、2年後に仕事のことで技師長高橋庸輔氏と意見の相違があり、袂を分った。

## 2. 西川風琴製造所

### (1) 西川寅吉（虎吉）

嘉永3年(1850)頃、常代村の松本新吉生家の隣、伊藤家で生まれ、横浜の西川家の養子となる。初めは三味線職人だったが、西洋楽器に惹かれ、明治9年(1876)から外国人技師の助手をしながらオルガンおよびピアノの製造法、調律、修理の技<sup>ワザ</sup>を習得した。明治16年に独立、元町で調律、修理業を興し、明治17年に風琴(オルガン)製造を始めている。(資料編：引用記事『日本のピアノ100年』(前間孝則、岩野裕一、草思社)「横浜外国人居留地の楽器商」参照)

(注)「読売新聞」(明治16年11月22日)記載の西川寅吉の広告、「東京日日新聞」(明治20年12月14日)記載の西川風琴製造所移転広告、および、『音楽雑誌』第15号(明治24年12月25日)記載の西川製造楽器広告によれば、明治9年から明治16年まで英国人クレン(Crane)とドイツ人カイル(Keil)に就いて、オルガンとピアノの製造、修理、

調律を修業、明治16年にオルガンとピアノの修理、調律の営業を開始し、明治17年、元町4丁目164にオルガン製造所を設立した。

ドーリング商会(資料編:引用記事『日本のピアノ100年』(前間、岩野著、草思社)参照)は、輸入ピアノ・オルガンの販売、修理、調律を受注した。明治20年頃、ドーリング商会が販売したピアノは、燭台と天使のレリーフが装飾され、「天使のピアノ」と呼ばれた。滝乃川学園(国立市)がこのピアノを所蔵している。日本ピアノ調律師協会の『歴史的ピアノの復元過程関連資料』によると、ドイツのハンブルクのG.H.O.Peyer製ピアノに、ドーリング商会のブランド名(J.G.DOERING)を付けており、滝乃川学園所蔵のピアノは滝乃川学園創立者石井亮一夫人筆子が明治17年(1884)～22年(1889)に購入したようだ。

西川寅吉は明治20年頃にピアノ作りを始めているが、音楽博士ドーリングにいろいろ教えてもらっている。

## (2) 西川オルガン製造所 【図1-2】

明治17年に西川寅吉がオルガンを製造したことは、『音楽雑誌』第15号(明治24年12月25日)の西川製造楽器広告に記されているが、『開化の築地・民権の銀座(築地バンドの人びと)』(太田愛人 築地書館)<sup>(注)</sup>と『銀座百話』(篠田敏造、角川書店)にも記載されている。元町のオルガン製造所では、オルガン製作のかたわら紙腔琴(コラム①参照)も製作していた。

元町で作ったオルガンが売れ始めると、西川寅吉は日之出町1丁目6番地(明治22年、市制施行で日之出町2丁目30番地となった)にオルガン製造の大きい工場を設立した。

西川寅吉製作オルガンは、明治20年の工芸品共進会で銀牌を受領し、明治23年の第3回内国勸業博覧会では、ピアノが有功二等賞、オルガンは有功三等賞を受賞した。

ピアノの試作も早かった。

(注)『開化の築地 民権の銀座』(太田愛人、築地書館)

(十字屋の)楽器店の始まりは、横浜に、帰国する外人の払い下げ品があったので、原と倉田が車をひいて出かけると、オルガンがあり、車に付けて帰る途中、横浜の腕の良い職人のことを聞きつけて、オルガンを修理させるついでに、新しく作らせた。

『開化の築地 民権の銀座』記事(横浜の腕の良い職人にオルガン発注)が十字屋と西川寅吉との繋がりとなった。「原」は十字屋設立者の一人、原胤昭、「倉田」は、後の十字屋の経営者倉田繁太郎である。『銀座百話』の記事(後出)により、紙腔琴が明治17年6月23日に公開されたことが明らかで、明治17年に西川寅吉がオルガンを作り、紙腔琴を完成させた。この年に西川寅吉と銀座の十字屋との繋がりが始まっている。

(注)日本人が作ったオルガン第1号については、明治20年の山業寅楠製、明治17年の西川寅吉製など諸説があるが、その前に、才田光則が明治14年に試作したオルガン(61鍵)が東京芸術大学で保存されている。

### コラム① シコウキン 紙腔琴

紙腔琴は小型蓄音器のようなもので、レコードのように曲が入っている曲譜(厚い和紙で作った巻紙)を紙腔琴にセットして、ハンドルを回すとオルガンの音のようなメロディーが聞こえる。紙腔琴は戸田欽堂トダキンドウ(註)が考案した。巻紙には、楽譜の音符位置に相当する場所に角穴があげられている。紙腔琴は横幅1尺、高さ5寸位の木箱で、箱の内部に音の数(大型は14音、小型は9音)だけリードが設置され、上蓋の、リード設定位置の上部に穴があげられている。紙腔琴のハンドルを回すと、巻紙(曲譜)が箱の上を移動するのと同時に木箱の中の輪フィフが稼働し、巻紙の角穴部が上蓋の穴を通るとき、その位置に空気が流れ、リードが音を出す。自動ハーモニカのようなものでもある。

『オルガンの文化史』(赤井勲、青弓社)：戸田欽堂(キリスト教徒、十字屋創設)が、宣教師カローザス(C. Carrothers)が持っていたオルガネット(organettes、携帯小型パイプオルガン)を参考に考案し、上原六四郎の指導を得て明治17年に製作した。

『無師独奏 紙腔琴』(十字屋編カタログ)：西川寅吉の手伝いで紙腔琴が完成した。

『銀座百話』(篠田鈺造、角川書店)：(戸田欽堂が)「紙腔琴」という楽器を新発明して、この楽器の披露会を明治17年6月23日、両国の中村楼で催し、来賓並びに新聞記者等に聴いて貰い、盛大な宴会を開いた。『東京日日新聞』記事(明治17年12月9日)：紙腔琴 銀座三丁目の書肆十字屋にて売出す紙腔琴は戸田欽堂氏の発明にして、去る6月22日に江東中村楼にて開きをせられ、諸家の喝采をも得たりというが、何さま其音は微妙にしてオルゴールに近く、又胡弓にも似て甚だ品のよきものなり。其奏法取扱いは本日の広告に明亮なれば就て見たまえ。又其外装も美麗なれば、雅流が席上の玩器とするも甚だ妙なり。

(注) トダキンドウ 戸田欽堂(1850～1890)：本名＝戸田三郎四郎氏益。大垣藩主戸田氏正の四男。明治4年に渡米。帰国後洗礼を受け、明治7年、銀座3丁目にキリスト教徒原胤昭と十字屋書店を創設。明治17年、紙腔琴を考案、十字屋で販売。

(注) ウエハラロクシロウ 上原六四郎(1848～1913)：音楽理論家、物理学者。陸軍士官学校、音楽取調掛、東京音楽学校、高等師範学校の教官を歴任。

## 3. 解 雇

### (1) 解雇の広告

明治26年、松本新吉は解雇され、日本橋の下槇町シタマキチヨウに引越した。

『東京日日新聞』(明治27年1月21日)と『音楽雑誌』(音楽雑誌社、明治27年1月25日発行)に、新吉解雇の広告【図1-3】が載った。

#### 『音楽雑誌』(音楽雑誌社、明治27年1月25日発行) 西川風琴製造所の解雇広告

松本新吉

右之者、近頃、当製造所之名義ヲ加へ且ツ調律師タル信認状ヲ得タルモノノ如ク誇大ノ広告ヲ吹聴シ、吾ガ愛顧諸君ノ許へ強テ罷出候旨聞及ビ候。然ルニ、右新吉ナル者ハ、昨年中雇置シ者ニテ、同夏中、所主西川寅吉疾病ノ為、不得止、代理致サスルト雖モ、愛顧諸君ヨリ、屢々同人ハ技術不完全ナレバ、可然者ニ差替ルベキ趣、申越サレ、無抛、爾後ハ西川付添ヒ、後見ノ上、調律等致サセ居シ処、其後團々不都合有之。旁々解雇致セシモノニシテ、勿論未ダ技術不熟ノ者故、曾テ何等ノ信認状ヨンドコロナクヨモ付与セシコト無之、從テ亦当製造所モ同人ニハ更ニ関係致サズ候間、吾ガ従来之愛顧諸君ニ於テ西川ヲ信用被下所ヨリ、万一彼ガ詐術ニ罹リ、御大功ナル楽器ヲ任セ、不都合等生ジ候節ハ、甚ダ申訳無之且又当製造所ノ名義ニモ関スル次第ニ御座候間、此段、為念御愛顧諸君ニ謹告仕シ也。

横浜市日之出町二丁目三十番地 西川風琴製造所

## (2) 解雇の背景

明治16年、麹町に建てられた鹿鳴館でピアノが演奏された。明治17年の華族令により、華族の社会的身分が確定し、東京に住むことが義務付けられたこともあり、西洋邸宅建築、ピアノ設置などが始まった。しかし、ピアノは値段が1,000円(江戸時代の貨幣では千両)前後の高価品で、保有者は少なく、調律依頼は少なかった。それでも、自立して日本橋に住む松本新吉に一ヶ月に3、4件調律依頼があった(『音楽』(東京音楽学校、明治44年)記載、「松本新吉談話」)ことは、調律師として知れわたっていたことを示す。調律師としての松本新吉の技量は、明治33年に渡米してピアノ作りを修業したブラドベリーピアノ工場でのピアノ調律の腕前を試されたとき、見事に調律して、見ていた職工達が拍手喝采したことや、後に、細川侯爵邸で輸入ピアノの調律を依頼され、詳細に調べた結果、異状なく、修理、調律するべきところがない旨を伝えると、侯爵が正直な新吉の態度に感心し、侯爵秘蔵のフランスの1800年製ワインを1本与えたことなどにも現れている。

明治26年頃、西川寅吉は中風で半身不随状態だった。明治26年には養子の安蔵が14歳になっており、西川寅吉にとって、西川風琴製造所の後継者でない松本新吉が、西川風琴製造所の調律師として有名であることが気になったのだろう。これらのことから、寅吉は、跡継ぎの安蔵への期待が強まり、明治27年1月25日発行の『音楽雑誌』(音楽雑誌社)に西川風琴製造所の解雇広告を載せた、と類推できそうである。『日本のピアノ100年』(前間孝則、岩野裕一、草思社)の記事:「一子相伝の秘術」(資料編参照)にも同様の推理が記されている。安蔵は、明治27年に西川風琴製造所の見習いになった。

## (3) 明治時代のピアノ調律師

明治時代の前半にピアノを所有した家は、皇族、華族が主体で、広い屋敷に建つ大邸宅だった。ピアノ調律師は、礼服を着用、シルクハットを被り、人力車に乗って訪れたという。

【松本新吉伝】(大場南北、うらべ書房)記載:

### 「調律師の服装」

「わたしは或るとき、細川護立侯のお屋敷にピアノの調律に出かけたことがありました」と新吉老人は和尚にその折の話をはじめた。「何にせよ相手は華族様なので、フロックコート<sup>(注)</sup>にシルクハットという<sup>イデク</sup>扮装<sup>ツバ</sup>ちで出向く。調律師といえは職人に違いはないが、ピアノがある家というのは、当時は高級邸宅ばかりである。それを直しに行く調律師は、単なる職人風情であってはならない。一人の専門技師として、相手を辱めないだけのものを着用して行かなければならない」

(注) フロックコート(frock-coat): 男子の昼用正式礼服。上衣はダブルで丈が膝まで及ぶ。黒ラシャを用い、チョッキも同布地、ズボンは綿物をはく。

シルクハット(silk hat): 男子の正式礼服用帽子。頂上が平らな円筒型の高いクラウン(山部)に、ややそり上がった鍔が付く。黒の光沢のある生地のもが正式。(広辞苑)

# 自立

## 1. 紙巧琴製作

明治26年、西川オルガン製造所を解雇された松本新吉は、日本橋の下槇町(職人の町)に間借りし、オルガン・ピアノ調律、修理で暮らした。ピアノ調律、修理依頼は、一ヶ月3、4件だった。(『音楽』明治44年9月「松本新吉談話」)

ピアノ、オルガンの調律、修理がない日には、日之出町の西川オルガン工場での経験をもとに、紙<sup>シ</sup>腔琴<sup>コウケン</sup>を作って銀座の尾張屋<sup>(注)</sup>に見せたら、尾張屋山口幸次郎の気に入りに、「紙巧琴」【図1-4】と名付けて尾張屋が販売した。

明治28年1月、尾張屋が『音楽雑誌』50号(明治28年1月25日)に載せた広告。【図1-5】

○無師独奏紙巧琴○ (紙巧琴の図)

大形特別製 金12円 金10円 上製 金8円 金6円

小形特別製 金4円50銭 上製 3円50銭 3円 2円50銭

本器ハ勇壯活発ナル軍歌及ビ長唄、端唄ハ勿論、和漢洋ノ秘曲、御子供衆始メ、誰人ニモ自在ニ快樂ノ歌謡ヲ奏スル、美妙ノ音楽器ナリ。弊店ハ今回又々勇壯活発ナル軍歌ヲ種々本器曲譜ニ新作シ候。右曲譜ノ義ハ、我日本人士ノ忠君愛國ノ志ヲ養涵シ敵愾ノ念慮ヲ振興スルニ足ル。乞我忠君愛國ノ諸士御購求アツテ、愉快ノ音楽御試ミアラン事ヲ希フ。

紙巧琴発売元 銀座2丁目 尾張屋 山口幸次郎

製造人 築地新湊町5丁目1番地 ピアノ ヲルガン調律師 松本新吉

右 紙巧琴ハ、全国有名西洋小間物商店ニ有之候。

(注) 尾張屋：西洋小間物、手織物類の卸売り。銀座2丁目2番地。

尾張屋の紙巧琴は飛ぶように売れたので、松本新吉は曲譜229曲分作っている。(資料編：引用記事「紙巧琴カタログ」参照)

明治時代初期は、1ドル=1円(=1両)の時代だから、庶民の感覚では、紙腔琴(10円前後)が高価なものだったが、明治27年頃、松本新吉製作の紙巧琴を尾張屋が販売し始めたときは、飛ぶように売れたという。紙巧琴の曲譜が、長唄、端唄から軍歌、唱歌、讚美歌まで多種にわたっている。明治27、8年、日清戦争での勝利により昂揚した気分もあり、東京市が消費地として発達し、西洋音楽が普及し始めている。

明治26年11月、松本新吉一家は、新湊町5丁目1番地【図1-6】に引越した。(『音楽』(東京音楽学校、明治44年9月)「松本新吉談話」)。

明治17年の「陸軍部測量局製作五千分の一図」によると、新湊町5丁目区画の西側一部は新栄町5

丁目であり、新湊町5丁目はやや狭い。新湊町5丁目の3分の2には既に建物が立ち並び、北側の角地(5丁目の3分の1)は、約600坪の広い土地に大きめの建物が1軒建っているだけである。新湊町5丁目に引越して作った紙巧琴が飛ぶように売れ、新吉の収入も多かったので、新湊町の家を工場を建て、オルガンを作り始めている。渡米から帰国後、新吉が築地工場を拡張してピアノを10台以上作ることができる場所は、この土地だけである。この建物は尾張屋の倉庫だったのかもしれない。

築地工場が明治39年2月に火事で焼失し、松本新吉は明治39年9月、月島西仲通に月島工場を建てたが、明治40年の新湊町の地図では、松本ピアノ築地工場跡地と思われる土地が三河屋の製菓工場になっている。

## 2. 築地オルガン工場

紙巧琴販売の収入により松本新吉はオルガンを作り始めた。『音楽雑誌』明治29年12月25日に、松本新吉名でオルガン販売の広告を載せているが、オルガンの値段は15円から60円まで6種類、紙巧琴も6種類(2円50銭～12円)あり、紙巧琴の曲譜、ピアノ調律、修理なども載せている。この広告にオルガン6種類が載っているので、明治29年には、オルガン作りに力を入れ、職工を採用したことだろう。新湊町では「松本オルガン工場」と呼ばれた。ここでピアノを試作したことも伝えられている。明治29年12月の広告主は松本新吉で、尾張屋は表示されていない。尾張屋から借りていた家を松本新吉が買い取り、築地工場を拡張したのであろう。

## 3. 築地美以教会

新湊町5丁目1番地の築地工場から150m位の場所に築地美以教会が建っていた。これは明治8年10月2日、明石町11番地に創立されたメソジスト教会で、明治23年設立の銀座美以教会は、築地美以教会の分家といわれた。松本新吉は明治26年11月に新湊町5丁目に引越すと、教会に通い始め、この教会でメソジスト監督教会宣教師ソーパーにより洗礼を受け、明治29年に銀座美以教会に移籍している。新吉は熱心なクリスチャンで、毎朝礼拝をしてから仕事を始め、日曜日には教会での礼拝を欠かさなかった。メソジスト信者になったことでアメリカの情報が増えたことも、渡米のきっかけになったことだろう。(コラム②参照)

### コラム② メソジスト

メソジスト【Methodist】：キリスト教。1729年ウェスレーらがオックスフォードで起こした敬虔主義(聖書を中心として体験と実践とを強調)の運動。(広辞苑)

米国メソジスト監督教会は1872年(明治5年)、日本伝道を決め、4人の宣教師(R.S.マクレイ、J.ソーパー、M.C.ハリス、J.C.デヴィソン)を日本に派遣、東京、横浜、函館、長崎に伝道拠点を設けた。M.C.ハリスは、明治6年(1873年)に来日、翌年函館に行き、米国領事を兼ねた。明治9年(1876年)、W.S.クラーク(William Smith Clark)が札幌農学校に赴任、M.C.ハリスに伝道を依頼した。M.C.ハリスは、農学校で伝道し、受講生のうち7人に洗礼を施した。その中に内村鑑三、新渡戸稲造が含まれている。

築地美以教会：明治8年(1875)10月2日、外人居留地築地明石11番地に築地美以教会設立。明治23年に建てられた

銀座美以教会の母教会。築地は本家、銀座は分家という当時の表現で、緊密なつながりが保たれてきた。（『銀座教会九十年史』）

後に銀座教会とサンフランシスコ教会間に密接な連絡が保たれた。（『銀座教会四十年史』）美以教会の「美以」は、Methodist Episcopal ChurchのイニシャルMEに音が似ている漢字「美以」を当てたもの。（『銀座教会四十年史』）

築地美以教会の会員は、明治35年5月、築地美以教会と銀座美以教会が合同して銀座の中央美以教会になったとき、中央美以教会会員となる。松本新吉は明治29年に銀座美以教会に入会しているが、明治35年5月、築地美以教会から中央美以教会への移籍者名にも入っている。同時に移籍した者の中に、松本つね（新吉の後妻）、高間利助（新吉の弟）が含まれている。この中央美以教会が発足する前に、銀座美以教会会員になっていた人（永眠した人も含む）は241名にのぼり、その中に松本新吉は含まれているが、新吉の妻のいの名は入っていない。（『銀座教会四十年史』による）

明治35年5月4日、築地美以教会と銀座美以教会が合同し、中央美以教会となる前に、築地美以教会所有の共葬墓地の所有権を銀座美以教会に譲渡したが、明治33年、共葬墓地を得たときの資料に松本新吉名が記されている。

『日本メソヂスト銀座教会歴史』（銀座教会四十年史）：

築地美以教会用共葬墓地記録

曩に築地美以教会は教会用共葬墓地所有の必要を感じ、茲に醸金し明治三十三年六月十二日附を以て別紙使用券に依って、其権を得候間、寄付者人名と共に保存致置候也

明治三十三年六月十九日記之

一坪 和田剣之助 一坪 川崎芳之助 一坪 中坪八百子、小金澤久吉、鈴木甕男、長崎勝三郎、山田謙次郎、松田啓子、松本新吉

教会用共葬墓地は三坪で、中坪八百子以下松本新吉までの7人で1坪購入になる。

『銀座教会四十年史』によると、明治35年5月4日、中央美以教会発足の後、築地美以教会管理者松本新吉は、明治35年8月、其筋に対し、築地美以教会の廃止を届出ている。

新吉は明治29年に銀座美以教会に移籍していたが、築地美以教会との繋がりは続いていた。